# Za・あく"りふおーむ

2022.2.7 Vol.24



## ツバキ

撮影日:令和3年4月29日 撮影場所:秋田市 民家敷地

# ❤ 目次

生産現場情報:平鹿平野で大規模複合経営~農事組合法人塚堀農事生産組合 ・・・・P1~2
営農支援情報:令和4年産水稲の重点指導事項・・・・・・・・・・・P3~6
ご 紹 介:① 2022シーズンに向け県外キャンプを行うブラウブリッツ秋田を応援!
~「秋田県産農畜産物贈呈式」を開催~・・・・・・・・・P 7
② "これまでも、これからも"秋田米たべようキャンペーン・・・・・・P8
③「JA全農あきたPRESENTS秋田ノーザンハピネッツホームゲーム」
を開催しました!・・・・・・・・・・・・・・・ P 9
④ラジオ番組「あぐりずむ」で「あきたこまち比内地鶏ぞうすい」が紹介
されました!・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P 1 C
お知らせ:Flower Valentine 2022 ・・・・・・・・P11

# ◆ 生産現場情報

# 平鹿平野で大規模複合経営~農事組合法人 塚堀農事生産組合~

#### 1. 法人設立の経緯

横手市の秋田自動車道横手北インターチェンジ沿いの農地で営農を展開しているのが「農事組合法人 塚堀農事生産組合」です。

昭和55年、稲づくりの資質向上を目指して塚堀集落の若手6人が設立した「稲作研究会」が 歴史の始まりです。その後、昭和58年に集落が「塚堀農事振興会」として農用地利用改善団体

の認定を受けると同時に「塚堀農事生産組合」を結成し、集落農業構造改善事業で15ha規模の育苗施設・籾乾燥調製施設を建設しました。平成8年には農業経営基盤強化支援事業で施設を増強するとともに、経営規模を35haに拡大しています。

さらに、平成19年からの農政改革(新たな経営所得安定対策、米政策改革推進対策、 農地・水・環境保全向上対策ほか)を見据えて、平成18年に「農事組合法人塚堀農事生産組合」に改組して周辺集落とも連携した法人として再スタートしました。

設 立:平成18年5月

代 表:代表理事 高橋俊悦

構成: 9戸(令和3年現在)

所在地:横手市清水町新田字皿川端93-1



(左から)理事 鈴木昭二さん、会長理事 鈴木和一さん、 理事 小田嶋清美さん、代表理事 高橋俊悦さん

#### 2. 経営の概要等

現在(令和3年)、約274haの農地で水稲132ha(密苗)、ホールクロップサイレージ用稲10ha、大豆79ha、小麦41ha、キャベツ4.1ha、えん麦4.5ha、スイカ1.7ha、アスパラガス1.2ha(促成ハウス2棟向け)などを栽培しています。

水稲作では、あきたこまち79ha、とうごう4号53haを約40日間かけて田植えを行っていますが、すべて密苗プール育苗で省力化を図っています。育苗箱処理剤にはヨーバルトップ箱粒剤を使用しているほか、農薬の圃場散布はドローン対応しています。

また、大量に発生する籾殻については、近隣の大規模畜産にも供給するなど、資源循環型農業



大豆乾燥調製施設内

にも取り組んでいます。

キャベツについては、茨城県の加工・販売会社との契約栽培で3.4ha分を供給していますが、収穫・運搬作業は会社自らが現地ほ場(横手市)で行っています。残りの0.7ha相当は雪の下キャベツなどで直売所等に出荷しています。

(農)塚堀農事生産組合では、労働力の制約から耕作可能面積は限界に近いことから、最近は耕作依頼のあった農地については近隣のUターン青年農業者で組織された新設法人への斡旋や、農業機械の貸与などを通じて担い手の育成にも寄与しているほか、繁忙期には労働力提供を享受するなどの連携も図っています。

#### 3. 今後に向けて

令和4年度に向けては、ホールクロップサイレージ用稲を現状維持し、飼料用米を増やす計画です。また、令和3年度に実施したペースト肥料の深肥・密苗栽培の試験結果が良好であったことから、新たにペースト肥料田植え機を導入して全面積をペースト肥料栽培に切り替える予定としています。

取材日(令和3年12月15日)には、促成アスパラガスの収穫・調製作業が始まっており、年明け以降もしばらく続くとのことでした。また、アスパラガスや雪の下キャベツ以外に、現有労働力の範囲内で冬季栽培可能な品目を模索中とのことでした。



アスパラガス(ハウス内)





アスパラガスの選別・調製作業

営農支援部 営農支援課 ☎018-864-2461



# ❤ 営農支援情報

## 令和4年産水稲の重点指導事項

令和3年産水稲の作柄は、農家等が使用しているふるい目幅(1.90mm)ベースの10 a 当たり収量が555kg、作況指数102の「やや良」となりました。また、10月末日現在の1等米比率は90.5%で、品種別の1等比率は、あきたこまちが91.0%、ひとめぼれが94.9%、めんこいなが91.3%となっており、2等以下に格付けされた主な理由としては、着色粒が55.3%、形質が27.0%、被害粒12.9%となっています。

令和4年産水稲作では、昨年の課題を克服し、気象変動に対応した強い稲づくりと県産米の食味・ 品質の一層の向上と安定化を図るため、次の技術対策を重点に推進してください。

## 【気象変動リスクを軽減する総合的な土づくり】

高品質・良食味米を安定的に生産するためには、排水性の向上や土壌養分の均一化、地力の増強や深耕によって根を健全に保ち、根域を深く拡大させ、生育途中の急激な葉色低下や生育の停滞を防ぎ、登熟後半まで根の養水分吸収能力や光合成能力を高く持続させることが重要です。

排水性を向上させるため、暗きょ、補助暗きょの施工によって透水性を改善します。排水不良田では、溝切り、明きょの施工で表面排水を図ります。

近年、耕深は浅くなる傾向にあり、少なくとも15cmは確保するようにします。ただし、深耕によって下層のやせた土が混入したり、深耕に伴う適切な肥培管理を行う必要があるため、深耕は一挙に行わず、年数をかけて徐々に深くします。

また、定期的に土壌診断を行い、診断結果に基づき、資材の画一的な施用を見直し、必要な量のたい肥や土壌改良資材、化学肥料を施用して、バランスの良い土壌養分状態を維持していくことが重要です。

#### 【適期の田植えと栽植密度の適正化】

極端な早植えや遅植えは、その後の気象経過により作柄や品質に大きく影響するため、ハウス内 気温やかん水等に留意して健苗育成に努め、適期に田植えを行います。また、適正な種子予措を行 うためにも、浸種水温の確保が難しい早植えを避け、計画的な作業に努めます。

低温による初期生育の遅延を避け、出穂期の早期化による高温登熟の影響を軽減するため、田植えは次の時期(あきたこまち中苗の場合)を目安に行います。また、田植え時期に加え、地域にあった品種選定も重要です。

#### 田植え時期(鷹巣:5月15~20日頃、秋田:5月20~25日頃、横手:5月20~25日頃)

近年の栽植密度は低下傾向にあります。栽植密度の低下は、その後の茎数確保(穂数確保)に大きな影響を与え、作柄・品質・食味の低下も懸念されることから、㎡当たり21~22株(70株/坪)以上を基本として、1株当たりのかき取りは3~4本を目安に実施します。

#### 【水管理による適正な生育量の確保】

本田の水管理は、安定して作柄を確保するため重要な技術です。特に、初期生育の良否は、その後の生育量や出穂時期、収量まで影響します。このため、活着後は温暖な日に浅水、寒い日に深水とすることにより、水温・地温を高めて初期生育の確保に努めます。

中干し開始時期は、中苗あきたこまちでは、6 号 1 次分げつが発生した時であり、中干しを遅れずに実施して、充実した有効茎の確保を図ります。中干しの期間は $7\sim10$  日位とし、田面に亀裂が $1\sim2$  c m入り足跡が付く程度とします。過度の中干しは根を傷め、稲体の衰弱につながる等の悪影響があるので注意します。

幼穂形成期から減数分裂期頃にかけて、稲は低温に弱い時期であり、この時期に日平均気温 20°C以下や最低気温17°C以下の低温が予想される場合は、深水管理とします。

出穂期後10日間は、湛水状態にして水を切らさないようにします。また、高温が続く場合には 田面水温が高くなることから、掛け流しや水の入れ替えに努めます。その後は間断かん水を基本と し、早期の完全落水は避け、品質向上に努めます。

高温時やフェーン現象等の乾燥した風が強い日は、掛け流し等の水管理を行います。

#### 【生育中期の適正な施肥管理】

生育中期の施肥管理は、理想生育量と比較する生育・栄養診断により適切に実施し、追肥の要否や施肥量の判断を行います。ほ場間のバラツキが大きい場合は、ほ場ごとに適期に生育・栄養診断を実施して対応します。

㎡当たり籾数が過剰になると整粒歩合は低下し、米粒中の窒素含有率は高くなり、品質・食味が低下します。あきたこまちにおいて、目標収量を $5.7.0\,k\,g/1.0\,a$ とした場合に必要な㎡当たり 籾数は $3.0...3\sim3.1...5$ 千粒であり、幼穂形成期の栄養診断による追肥により、目標の㎡当たり 籾数の確保に努めます。

中干し以降の葉色低下は、下層への根の伸長を減少させるとともに、収量・品質へ大きく影響します。このため、肥効調節型肥料の利用やたい肥の施用による地力向上を図り、葉色低下を防止します。

#### 【雑草防除の徹底】

近年、田植え時期に気温が平年より高くなることがあり、雑草の発生と生育は早期化する傾向にあります。除草剤散布が遅れたほ場では、高葉齢になった雑草の取りこぼし事例が見られます。また、生育後半におけるノビエ等の発生が目立つほ場も散見されます。雑草の多発は害虫の発生にも影響し、多発したほ場は埋土種子量が多いと考えられるため、除草剤を適期に効果的に使用して、雑草防除の徹底を図ります。

除草剤の使用は、雑草の種類と量に応じた適切な除草剤を選択し、適期に使用するとともに、使 用上の注意を守り、除草剤使用後7日間は止め水として水質汚染を防止します。

除草効果を十分発揮させるために、畦畔補修等の漏水対策や田面の均平、ほ場条件に合わせた剤

型(フロアブル、ジャンボ剤等)の選択が望ましいです。

また、水田周辺の下流など、水系環境に配慮し、田植え前は除草剤を使用しないようにします。

#### 【いもち病防除対策】

本田におけるいもち病の発病の主因は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みのほか、乾燥状態で冬を越した稲わら、籾殻です。したがって、稲わら、籾殻を育苗施設から撤去し、適正かつ効果的な種子消毒、育苗期防除で持ち込みを最小限にくい止めることが基本的な対策です。

育苗期防除は、ベンレート水和剤、ビームゾルのいずれかで行い、本田防除には育苗箱処理剤などを使用して、葉いもち防除をし、穂いもちの被害を未然に防ぐよう努めます。なお、疎植栽培や高密度播種苗栽培では、側条施薬装置を用いた防除が有効です。また、出穂期前後が多湿の年は穂いもちが多くなりやすいので、穂いもちの適期防除に留意します。

#### 【斑点米カメムシ類防除対策】

本県の主要加害種であるアカスジカスミカメは、水田内外の除草対策が重要であります。水田内にホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生すると、本種の水田内への侵入を助長するので、雑草防除を徹底します。また、畦畔・農道の除草対策として、出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布当日から7日後までに草刈りを必ず行い、本種の増殖源となるイネ科雑草の除去に努めます。

薬剤散布は、水田内に出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接したほ場、発生予察情報に基づいて多発が予想される場合は、出穂期10日後頃の茎葉散布に加え、出穂期24日後頃の2回目防除を必ず実施します。

## 【台風等による被害対策】

台風は強い風雨を伴うため、倒伏や風水害、進路によってはフェーン現象や潮風害の原因となります。特に、倒伏すると受光体勢が著しく悪化し、登熟の低下による減収と穂発芽による品質低下 を招くため、倒伏した場合は対策として次の事項を実施します。

- ①ほ場の停滞水は早めに排水する。
- ②早期に倒伏した場合は、速やかに4株ずつ束ねて立て直し、穂が乾燥するようにする。
- ③登熟後期の場合は、早めに刈り取るとともに、穂発芽した場合は刈り分けを行い、品質低下を 防止する。

#### 【適期の刈り取りと乾燥・調製】

刈り遅れや早刈りによる胴割れや青未熟粒混入の品質低下を防止するため、適期の刈り取りに努めます。刈り取り時期は出穂期後の日平均気温の積算値を目安としますが、日照時間が平年より少

ない場合は、出穂期翌日からの積算日照時間も考慮します。なお、ほ場ごとに条件が異なることから、最終的な刈り取り時期の決定は、各ほ場の籾の黄化程度(黄色+白色)を確認し、黄化が90%に達した時期で判断します。

刈り取り作業は、乾燥・調製能力に合わせた作業計画を立てます。また、カントリーエレベーターやライスセンターを利用する場合は、早期に利用計画を組みます。

乾燥と調製は、米を商品として仕上げる大事な作業です。作業の良否が米の品質・食味に影響するため、過乾燥を避け、籾摺り・米選を適正な処理量で行います。

(注)作況ニュース(第8号)より記載していますので、詳しくは「作況ニュース(第8号)秋田県農林水産部」及び 「稲作指導指針(令和3年3月秋田県農林水産部)」を参照のこと

# → ご紹介

# 2022シーズンに向け県外キャンプを行うブラウブリッツ秋田を応援!

## ~「秋田県産農畜産物贈呈式」を開催~

2022明治安田生命 J 2 リーグ開幕に向け、高知県でキャンプを行うブラウブリッツ秋田を秋田県産農畜産物で応援しようと、1月8日に「秋田県産農畜産物贈呈式」を開催しました。ブラウブリッツ秋田へ贈呈した県産農畜産物は、「秋田県産あきたこまち」400kg、秋田県産りんご100%使用のジュース「"のむ"りんご」・秋田県産トマト100%使用のジュース「"のむ"トマト」計30ケース、「秋田県産豚肉」50kgです。



左から)田中雄大選手、JA全農あきた 佐藤英一副本部長、新井栄聡選手、半田航也選手

JA全農あきたの佐藤英一副本部長が「昨シーズンは目標としていたJ2残留の達成おめでとうございます。今シーズンはさらに上を目指し、J2優勝争いができるよう上位で戦ってほしい。県産農畜産物を食べて子どもたちに夢を与えるような大活躍を期待しています」と激励し、新井栄聡選手、田中雄大選手、

半田航也選手へ目録を手渡しました。贈呈をうけ、田中選手は「県産農畜産物を食べてキャンプでパワーアップし、開幕に臨みたい」と意気込みを話しました。JA全農あきたは、昨シーズンに引き続き20 22シーズンもユニフォームスポンサーとして、ブラウブリッツ秋田を応援していきます。

(高知キャンプで秋田県産農畜産物 が選手たちに振舞われました) →



## "これまでも、これからも"秋田米たべようキャンペーン

JAグループ秋田・JA全農あきたは、令和3年産新米クローズドキャンペーンに引き続き2月から「"これまでも、これからも"秋田米たべようキャンペーン」を実施します。



実施期間:第一弾 令和4年2月1日~28日当日

消印有効

第二弾 令和4年3月1日~31日当日

消印有効

応募方法:JA全農あきた対象商品に貼付している

応募シール1枚を1口とし、郵便はがき

に貼付しご応募頂きます。

※5 k g 未満は半口となりますので、応

募シールは2枚貼付となります。

プルゼント賞品:第一弾①秋田米セット 250名様

②秋田高原ハムセット250名様

第二弾①秋田米セット 250名様

②とんかつ用桃豚 250名様

#### 【全国展開・令和3年産秋田米新米キャンペーン】

昨年12月31日まで展開した「令和3年産秋田米新米キャンペーン」の抽選会を1月20日に行いま

した。全国各地で対象商品の秋田米を購入し、ご応募いただいた方の中から抽選で「比内地鶏きりたんぽ鍋セット」が550名様、「まげわっぱ小判型弁当箱」が200名様、そしてWチャンス賞として「オリジナル図書カード」が250名様の合計1,000名様に当たるというものでした。

**応募数は46,237通!**日本全国からたくさんの応募がありました♪



#### 【県内キャンペーン・秋田のおいしい!が当たる!秋田米新米キャンペーン】

このキャンペーンは、昨年12月30日まで秋田県内店舗およびJAタウン「おらほの逸品館」で販売されているJA全農あきたパールライス商品を対象に実施。 ご応募いただいた方の中から抽選で、『秋田



のおいしい!』ものとして、A賞:「秋田牛すき焼き用400g」、B賞:「酒香秀吟 穂(百田・一穂積いずれか1本)」、C賞:秋田米新品種「サキホコレ2kg」をそれぞれ50名様、合計150名様にプレゼントするというものでした。

**応募数は、1,090通**でした。

#### 「JA全農あきたPRESENTS秋田ノーザンハピネッツホームゲーム」を開催しました!

JA全農あきたは令和3年12月12日、秋田市の「CNAアリーナ☆あきた」で行われたプロバスケットボールBリーグ1部(B1)「秋田ノーザンハピネッツVSアルバルク東京」戦で初めてゲームスポンサーを務め、会場内外を多彩なイベントで盛り上げました。JA全農あきたと秋田ノーザンハピネッツは今年度、JA秋田おばこ、秋田県立大曲農業高等学校とともに「HAPPYTOGETHERONE」プロジェクトと題して秋田米新品種「サキホコレ」の農作業体験に取り組み、その集大成として冠試





プロジェクトを紹介(佐々木会長(左)が登場)

大曲農業高校の生徒による「サキホコレ音頭」披露

メインアリーナで行われたオープニングセレモニーでは、「HAPPY TOGETHER ONE」プロジェクトの取り組みを紹介しました。コート上には、プロジェクトでお世話になったJA秋田おばこサキホコレ生産専門部会の佐々木竜孝会長に登場してもらいました。また、コロナ禍のため「サキホコレ」農作業体験への参加が叶わなかったプロジェクトメンバーの大曲農業高校の生徒たちは「サキホコレ」のPRと、「サキホコレ音頭」を披露してくれました。

「HAPPYTOGETHERONE」プロジェクトで収穫した「サキホコレ」は、秋田ノーザンハピネッツとアルバルク東京へそれぞれ100kg 贈りました。

また、入場口では、大曲農業高校の生徒と一緒に、ブースター先着2,000名様に新米「あきたこまち」300gとニッポンエール「秋田県産北限の桃グミ」をプレゼントしたほか、エリア82(サブアリーナ)では、大曲農業高校

郷土芸能部のみなさんが「ドンパン節」など5曲を披露し、会場を盛り上げました。







## ラジオ番組「あぐりずむ」で「あきたこまち比内地鶏ぞうすい」が紹介されました!

ラジオ番組「あぐりずむ~ニッポン いただきます紀行~」は、毎週木曜日の15:50~16:00 に放送しています。(地域により放送時間が異なります)この番組は、JA全農が運営する産地直送通販サイト「JAタウン」にズラリとそろった全国のおいしいモノをお取り寄せし、生産者の声や開発の道のりなど商品の魅力を紹介しています。

1月6日の放送では、JA全農あきたのショップ「おらほの逸品館」で販売している、こまち食品工業株式会社の「あきたこまち比内地鶏ぞうすい」が紹介されました。番組内では、こまち食品工業株式会社の高橋東代表取締役が電話出演し、全国のリスナーに向けてPRしました。





番組パーソナリティーの川瀬良子さんが実際に試食。「ぞうすいになっても分かるお米の美味しさとスープの旨味!食材の良さがしっかり伝わるのに、あっさりとしていて身体に優しいお味です。玄米も入っているので、プチプチ食感も楽しめます」と感想をくださいました。



こまち食品工業株式会社 髙橋東 代表取締役

あきたこまち比内地鶏ぞうすいに使用されている原材料は秋田県産の食材にこだわり、秋田を代表するお米「あきたこまち」、秋田自慢の「比内地鶏」の肉とスープ、秋田県産の「舞茸」や「ごぼう」、そして素材を生かすために男鹿半島の海水からつくられたまろやかな塩だけで味付けしています。



あきたこまち比内地鶏ぞうすいは JAタウン「おらほの逸品館」で 購入できます









秋田県内の生花店と花きを取り扱う卸売業者でつくるフラワーバレンタイン推進委員会は、バレンタインデーに男性から女性に花を贈る「フラワーバレンタイン」を広めるとともに、秋田県産花きをPRし生花業界を活気づけようと2010年から活動しています。あきた園芸戦略対策協議会(事務局:JA全農あきた)もこの活動に特別協賛しています。

